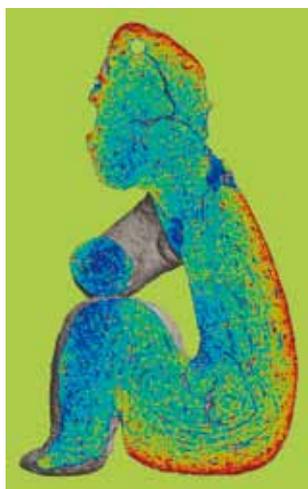




mnividens

【オムニヴィデンス】



「しゃがみ腕を組む土偶」 弘前大学所蔵

この土偶は、縄文後期青森県田子(たっこ)町野面平(のおもてたい)遺跡より出土した素焼きの土製品(83mm高)です。上図には写真(小川忠博撮影・弘前大学提供)とCT像から再現したCG像を並べています。それぞれから土偶の顔のなめらかさや、手足や腰、背中にほどこされた細かな文様が見とれます。左図の断層像では密度の低い部分を青色、高い部分を赤色で示しています。土偶の背上部から胸にかけて、密度の低い補修痕を確認することができます。内部には土をこねて延ばしたときにできるたくさんの空隙が見られ、それらの伸びの方向は造形過程を再構築するための手がかりになります。3次元コンピュータ技術は考古学研究の新しい道具となりつつあります。

2014.11

NO.

46

ミュージアムを大学の中心にする

於愛媛大学第17回大学博物館等協議会・第9回博物科学会参加の記

松山に降り立つ

にわかには機首が傾くと瀬戸内海の孤島の群れが眼下に姿を見せた。絵画のような風景がみるみるうちに現実の大きさになり、磨りガラス状の海面が間近に迫ると、つぎの瞬間、振動が体じゅうを包みこんだ。

愛媛県松山市。松平の旧城下町で子規や虚子の生地であり、漱石ゆかりの地でもある。人口は51万。板張り床のレトロ市電に揺られ、二の丸跡の瀟洒で重厚な近代洋風建築の愛媛県庁などを眺めながら本丸跡をぐるりと北にまわれば、駅前から15分ほどで愛媛大学のある城北キャンパスに到着する。

このキャンパスのまさに中心に位置するのが、平成21年(2009)に開館した愛媛大学ミュージアムである。

ミュージアムの発端

われわれ東北大学総合学術博物館は、館長以下6名、愛媛大学において2014年6月19日、20日の両日におこなわれた標記の協議会・学会に乗りこみ、3本のポスターと1本の口頭発表を引っさげて他館を圧倒するはずであった。だがこの小さなキャンパスに占めるミュージアム(大学博物館)の大きさに、まずは驚きを禁じえなかった。

愛媛大学には3つのキャンパスがあるが、法・文学部、教育学部、理学部、工学部を中心とする城北キャンパスの構内のなかほどには、愛大ミュージアムという約3千平米の広大な複合施設があり、その1階に愛媛大学ミュージアムが設営されている。

この建物自体は新築ではなく流用であり、以前は個々の研究室によって占められていたそうだが、耐震補強のための改修等により、整理してミュージアムの空間を確保したとのことである。2005年に当時の学長の肝いりで大学博物館設置にかんする研究会が発足。翌年に設置が承認され、2007年にWG設立。2008年には空間構築計画にしたがって概要が策定され、これまで民間で美術館・博物館・史料館などのデザインと設計実務に携わってきた徳田明仁氏を特命准教授として三顧の礼で迎えた。愛媛大学ミュージアムの総合計画を一任された徳田氏は、その言葉によれば、職業的には本来距離をおかねばならない研究内容の理解にまで踏みこんで、全教員の協力を得ながら、たった1年で展示を作りあげたということである(写真1)。

愛媛大学の宇宙

狭い入り口を抜けると回廊になり、広々

とした中庭を臨みながらエントランスホールへといたる。中庭はオープンテラスを兼ねたミュージアムガーデンになっていて、その手前には金属でできた扉枠だけのオブジェもある。いわく「可能性」だそうだ(写真2)。

内部の展示は学術標本資料・機材をふくめた、学内における研究業績の歴史を一覧できるように作られている。手作り感あふれる「トライアル・ミュージアム」との謂いだが、そうは見えない。松山のローカルなキャンパス風景から、たちまちにして大学の「宇宙」へと引きこまれる。予算が潤沢であったはずもなく、学長自身が「金づちをもつから」といったほどだったそうだが、経済寸法をもちいたり、既存の設備品の色調と統一感をもたせたり、あるいは柱状空間をたくみに利用したりして、愛媛大学の歩んできた歴史を通覧させる、みごとな空間がデザインされた(写真3)。そのエリアは「進化する宇宙と地球」「愛媛の歴史」「昆虫標本収蔵展示室」「生命の多様性」「人間の営み」の5つにわかれ、時計回りに、文字通り一周すると、最初の入り口にでるしくみだ。

昆虫の博物館

特筆すべきは、愛媛大学ミュージアムは国内有数の昆虫標本博物館だということ



1. 講演する徳田明仁氏



3. ミュージアム館内



5. 昆虫標本展示室



2. ミュージアムのサインの付いたオブジェ



4. 展示解説する学生スタッフ



6. 標本の数々

とである。海外を含めた多数の研究者がこのミュージアムの収蔵展示室のなかで研究をおこない、そのようすさえも展示の一部となっている。つまり、生きた博物館なのだ（写真5）。

興味深いのはホロタイプをのぞき、標本の台帳は作っていないということである。なぜなら、研究のために標本を破壊しなければならないことがあったり、あるいは外部の標本とトレードすることがあったりするので、厳格な資産管理をしてしまうとそうしたことがきわめて困難になるからである。おそらく、何千という標本箱の単位では、われわれのいう函架番号などとして管理しているとおもわれるが、逆にいえば、標本を固定したのではなく流動するものとして捉えることで研究の生命を担保しているのである（写真6）。

学生のための博物館

また、われわれを案内してくれた学生スタッフの、まるで本職の学芸員のような、板に付いた振る舞いにも感心させられた。彼女は学部2年生ということだった（写真4）。もちろん、ひとつひとつの標本のく

わしい解説まではむずかしいようだったが、一通りの展示の解説をこなし、言葉遣いの訓練もいきとどいている。しかも始めてまだ2か月だという。けだし、学部2年生という立場がタイミングとして絶妙だったのではないか。1年生では大学生活に順応するのに精一杯である。だが研究室に所属して専門研究をスタートする3年生では他分野に対する興味がうすれ、博物館の活動は余計ごととして認知される。つまり、自分の大学を知り、その広い研究分野から専門を選びだそうとするときに、博物館は絶好の機会をあたえたのである。

ポスターと口頭発表

さて、われわれのポスター発表としては、小川知幸が大学博物館の地域連携として「在仙12館のミュージアムによる知的情報資源の共有と地域への還元——SMMA（仙台宮城ミュージアムアライアンス）と「みちのく博物楽団」——」、佐々木理が「新学芸員養成課程博物館実習としての被災ミュージアム復興支援活動」、そして鹿納晴尚が「東日本大震災遺構3次元クラウドデータアーカイブ構築公開事

業」の3本を、また口頭発表として小川が柳田俊雄と共同で「企画展『考古学からの挑戦——東北大学考古学研究の軌跡——』発案から展示まで」の1本をおこなった（写真7）。

大学博物館の地域、また社会との連携は、近年強く要請されている共通の課題であり、いずれも他館の関心を集めて好評を博した（写真8）。発表総数はポスター11本、口頭14本。参加大学は31であった。

おわりに

以上まとめるに、大学博物館は大学のそのときどきのイベントや広報の機関として位置づけられかねない存在でもある。しかし愛媛大学ミュージアムのようすをみれば、そうではなく、まさに大学の中心にあって多角的にその姿を映しだす鏡のようなものなのだろう。そして学生を学生たらしめる場所なのだろう。おそらく、その運営の労苦にはひとかたならぬものがあるだろうが、大学ミュージアムの在りようとして、そこにひとつの規準を見た気がした。

（文＝小川知幸／
写真＝小川知幸・鹿納晴尚）



7. 口頭発表のようす



8. ポスター発表のようす

北川隆司鉱物コレクション展 — 教授を魅了した大地の結晶 — を開催しました

東北大学理学部自然史標本館にて2014年3月1日から2014年4月12日まで日本鉱物科学会・日本粘土学会、日本結晶学会の共催、そして国立科学博物館のご協力をいただき、標記の企画展を開催しました。故北川隆司教授は広島大学において鉱物学の基礎から地震災害環境問題まで幅広い研究をなされてきました。また、熱心な鉱物の蒐集家であり、世界各地で標本の収集をされていました。北川教授が生涯にわたって収集した個人

鉱物コレクションの一部を、鉱物の魅力を広く伝えたいというご遺志を継いで、ご遺族了解のもと、標本を公開いたしました。私財を投じて収集した約2,000点のコレクションの中から、とくに良質な標本200点を選び、鮮やかな色や大粒の結晶など、自然の造形を楽しみながら観察できる標本です。この展示は現在全国の博物館・科学館を巡回しています。東北大学でご覧になれなかった方もお近くで開催の折には是非ご覧ください。



展示された蛍石

「みんなでどろんこ！ 生きもの観察 in 地底の森」を開催しました

7月13日(日)、27日(日)の2回にわたり、SMMAクロスイベント「みんなでどろんこ！ 生きもの観察 in 地底の森」を開催しました。

この観察会は、地底の森ミュージアム(仙台市富沢遺跡保存館)・東北大学総合学術博物館・みちのく博物楽団が共同で企画・実施したもので、SMMA(宮城・仙台ミュージアムアライアンス)の参加館としては初のクロスイベントです。定員40名で募集したところ倍の応募があったため、急遽2回目もおこなわれました。

2万年前からつながる環境

最初に地底の森ミュージアム館内にある約2万年前の化石林を全員で見学しました。ここからは石器や焼き木の跡が見つかっていて、富沢には2万年前から人間の営みがあったことを担当学芸員の佐藤祐輔さんが教えてくれました。

その後、ミュージアムに隣接する田んぼに移動。ここは2万年前には湿地帯でしたが、現在は古代米を栽培する田んぼになっています。メインのイベントは、ここに生息する生きものをみんなで採集して観察し、身近な場所にあるのに見えていなかった別の世界を楽しみながら学んでみることです。

メダカじゃなくてタモロコ

まずは田んぼやその脇の水路で生きものいそうな場所を探しました。そこを泥ごと網ですくい採り、中身をいったんバケツに移したあと、スタッフがきれいに泥を洗い流し、中身を少しずつバットに広げました。参加者にはそのなかにいる数cm~1mm程度の生きものを丹念に探してもらいました。

見つけた生きものは、生きたまま観察するために、できるだけ傷つけないよう、小さな網やスポイトを使い、小分けケースに

移しました。ある程度見つかったら、選んでもらった生きものを透明なケースに移して、上下左右いろんな角度からじっくりと観察してもらいました。小さくて肉眼ではよく見えない場合は手作りの「どこでも顕微鏡」で観察しました。

こうして観察してもらったあと、スタッフが参加者にその特徴をたずね、生きもの「名前調べ」をしました。このとき、みちのく博物楽団の向井康夫さんが用意した、便利な生きもの分類表を使いました。

最初は「メダカだ!」と言っていたお子さんも、魚のイラストの描かれた分類表を見ながら、背びれの位置や尾びれの切れ込みなどの特徴をみていくと、メダカではなく「タモロコ」という別の魚であることがわかって驚いたようでした。

田んぼにいる多彩な生きものたち

このように観察することで、ザリガニやカエル、小魚などの生きものだけでなく、ふだんなら見落としてしまいそうな小さな生きものもたくさん見つけることができました。

たとえば、水中をウニウニと動く2~3mmの芋虫のような生きものも、その特徴を追っていくと、ユスリカの仲間であることがわかりました。さらに、フィールド顕微鏡や分類表を使うと、肉眼で見ただけでは区別がつかない複数種のユスリカがいることもわかりました。

※

今回の観察会を通して、生きものを採集するだけでなく、その特徴をじっくりと観察し、丹念に名前を調べることの大切さと、身近な環境に別の世界が広がっていることに気づくことができたとおもいます。

イベントでは、地底の森ミュージアムの施設と学芸員、総合学術博物館とみちのく博物楽団の専門知識とメンバーが一体になることで、単館では実現しづらい、内容の濃い観察会をおこなうことができました。子どもたちの旺盛な知識欲と行動に、親御さんたちも絶えず笑顔で付き添っていたのが印象的でした。さまざまな施設や団体の長所を生かせる催しを今後も企画する予定です。

(文=滝澤 護・小川知幸/

写真=鹿納晴尚・小川知幸)



ほんとに生きものいるのかな



泥を洗ってバットに広げて



透明ケースでじっくり観察

田んぼの生きもの図鑑 viewer!

(図鑑機能)



使用した観察ツールのひとつ



どんなかたち? どんな動き方?



採集準備完了!

みちのく博物楽団が「サイエンス・デイ 2014」に参加しました

学都「仙台・宮城」サイエンス・デイは NPO 法人 natural science の主催により、毎年、県内の教育機関、研究機関、民間企業等が連携して一般の方に科学の本質を知っていただく体験イベント等を実施しています。

今年は7月20日(日)に開催され、わたしたち、みちのく博物学団のメンバーも、理学部自然史標本館(総合学術博物館)にて特設展示をおこないました。

「ミニミュージアム in ミュージアム」と題して、東北帝国大学の地質学古生物学教室の教授であった矢部長克、早坂一郎らにゆかりのある化石標本や現生標本を揃え、教授の経歴や研究の解説を交えて一般公開しました。

目を引くのは、アンモナイト化石研究で有名な矢部長克が研究・記載した「ニッポニテス」、S字カーブが特徴的な兵庫県産の異常巻きアンモナイト「プラビトセラス」、そして松本彦七郎が研究した黒光りする「センダイゾウ」の歯の化石などです。

また、畑井小虎や早坂一郎が研究した腕足動物化石は、初めて見る方には二枚貝に見えるようで、解説のなかでそれとはまったく異なる動物であることを伝えると、「へえー、そうなんだー」とたいへん驚いたようだったのが印象的でした。

これらの標本は、ふだんは博物館の標

本庫に大切に保管してあり、一般の目に触れる機会がほとんどないのですが、とくにめずらしいのが、早坂一郎が宮沢賢治から譲り受けたといわれるクルミの化石です。正直なところ、これには準備したわたしたち自身も驚きを隠せませんでした。

また、来場の方々には常設展示の解説もおこないました。

恐竜好きで来場されたお子さんも多く、ステゴサウルスや昨年7月に加わったフクイラプトル・キタダニエンシス、そして当館所蔵のウタツサウルスが人気でした。ちなみに、ウタツサウルスの種小名「ハタイ」は、前述の畑井小虎にちなんで名づけられたものです。解説をすると、やはり見ただけではどんな展示かわからないという方も多く、「わかりやすい解説、ありがとうございました」とのお声かけをいただき、うれしくおもいました。

メイン会場の川内北キャンパスから離れた総合学術博物館での出展であったにもかかわらず、最終的に138名の来場者をお迎えすることができました。お子さんから大人まで、たくさんの方々のご来場があり、年齢を問わず多くの方々に東北大学の地質研究の歴史や地学について知っていただくきっかけになったのではとおもいます。

(文=藤岡 大/写真=静谷あてな・

蟹澤聰史本学名誉教授)

サイエンス・デイ AWARD 2014 表彰式・交流パーティー

つぎに、7月25日(金)には、東北大学カタールサイエンスキャンパスホールにて、サイエンス・デイ AWARD の表彰式と交流会がおこなわれました。

一般的な科学・技術の評価制度はその成果に対して評価を下しますが、このサイエンス・デイ AWARD は科学や技術の成果だけでなく、科学的なものの見方や考え方、科学に対する姿勢などから出展者を相互に評価することを目的としています。そのため、個人・団体を問わず、誰でも自由に賞を新設することができる仕組みになっており、みちのく博物楽団からは、

(1) 地域の自然(生物・地理地質・天候)に関連した調査や研究

(2) 地域の科学・技術の発展に寄与する開発や研究

(3) 地域性のある教育プログラム

のいずれかの条件をみたと、地域に根差した活動を発表した出展者に向けて、「みちのく博物楽団賞」を新設しました。

当日は魅力的なブースが数多く出展されていましたが、泉ヶ岳の凝灰岩を題材にプログラムを作成した「宮城県仙台二華高等学校 地学部」さんに、みちのく博物楽団賞と、副賞として楽団オリジナルの缶バッジセットを贈呈させていただきました。

(文=條 将太/写真=藤岡 大)



S字の化石がプラビトセラス



カニや仙台で採れる二枚貝などの化石



アンモナイトの解説中



サイエンス・デイ当日のみちのく博物楽団のメンバー



仙台二華高校地学部さんに賞を授与

新館長ごあいさつ



東北大学大学院
理学研究科地学専攻
教授
井龍 康文

PROFILE

(いりゅう やすふみ)
1958年生まれ
専門：炭酸塩堆積学・
地球化学

2013年4月より柳田俊男教授の後任として館長を務めております。歴代館長が博物館の所属教員であったのに対し、私の本籍は理学研究科地学専攻であり、博物館においては外様の存在です。しかし、地学専攻は現在の総合学術博物館の前身である理学部自然史標本館の設立および建設に深くかかわった経緯があり、教育と研究で緊密な連携関係にありますので、総合学術博物館の発展に貢献すべく、館長の任を務めております。

「博物館行き」という語があります。この語は、一般に、時代遅れで役立たなくなったことという意味で使われています。しかし、これは大いなる誤解であるという例をご紹介します。1920年代に、アメリカの古生物学者であるチャールズ・ウォルコットによ

り、カナディアン・ロッキーのバージェス頁岩という地層から、きわめて保存のよいカンブリア紀の化石が発見されました。後にバージェス動物群と名づけられた化石の多くは、他の地域からは産出しないものでした。ウォルコットは、それらの化石群にかんする分類学的研究をおこない、それらを既存の分類の枠組みに収めてしまいました。その数十年後、イギリスのハリ・ウィットントン、サイモン・コンウェイ・モリスらによりバージェス動物群の再検討がおこなわれました。彼らは、「博物館入り」していた試料について、スケッチをしては、表面を薄く剥いで、新たに現れた面をスケッチするという作業を繰り返して、化石の3次元像を作りあげていきました。その結果、多くの生物の分類学的位置が見直され、カンブリア紀の初頭(約5億2000万年前)には、すでに生物多様性が高かったことが示されました。このカンブリア爆発と呼ばれる古生物学上の大発見は、「博物館行き」となっていた試料にもづくものです。このように科学自身の進歩やそれを支える分析機器・技術の高度化により、博物館の収蔵標本が脚光を浴びることは少なくありません。博物館は時代遅れで役立たな

くなったものの倉庫ではなく、知の宝庫であるということができると思います。

近年、公立博物館の充実が著しく、地域おこしの目玉となっている例も見受けられます。そのようななか、大学博物館の存在意義を再確認しておく必要があると思います。上記の逸話は、この問題に対するひとつの回答を示していると思います。大学博物館の使命は、大学の教育・研究の過程で蓄積される資料・試料を収蔵し、それらを次世代の教育・研究に資すると同時に社会に還元することにあります。「教育・研究の過程で蓄積される資料・試料」は、大学が存続するかぎり、決して減少することではなく、増加しますので、それらの収蔵施設と適切な管理が必要とされます。一方、研究不正が大きな社会問題となり、研究資料・試料の適切な管理と保管が義務づけられようとしており、パウチャーの管理という機能も果たさなくてはなりません。私は、この東北大学総合学術博物館が大学博物館の存在意義を満足していけるように尽力したいと考えています。

みなさまよりご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

離任のごあいさつ



静岡大学大学院
理学研究科地球科学専攻
准教授
佐藤 慎一

PROFILE

(さとうしんいち)
1968年生まれ
専門：進化古生物学

この度、2014年8月1日付けで、静岡大学大学院理学研究科地球科学専攻に異動しました。総合学術博物館では、2000年9月より約14年間にわたり、教員・職員・学生スタッフのみなさまに大変お世話になりました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

大学博物館での私の「初仕事」は、本ニュースレター3号に寄稿されたピーター・ブリード客員教授の文章「大学博物

館のもつ特別な役割」を和訳することでした。ブリード先生の英文はウィットに富んで親しみやすく、大学博物館のもつ使命を的確にとらえたものでした。

とくに、「大学博物館とは、異なる専門領域の異なる興味をもった研究者らが一堂に会し、共通の学問的問題に対して共に議論しあい、共同で調査ができるような場所ではなくてはなりません」という文章には、翻訳した私も深い感銘を受けました。

その後も、このニュースレターとは縁が深く、2007年より本誌の企画・編集を前任者から引き継ぎ、25号から前号(45号)までを担当しました。本誌の表紙デザインは、スタッフのアイデアで、初期の頃は博物館収蔵標本類の拡大写真をシリーズで掲載していました。そのため、創刊号から毎号の表紙を並べてみると、大学博物館の収蔵物の多様さに驚かれることと思

います。

2000年12月には、展示室の一角を模様替えて、スタッフとともに「ミニ展示コーナー」を始めました。これは博物館での研究成果と、実際に研究に使用された資料標本類を展示することを目的としています。当初は、三葉虫や諫早湾干拓、仙台の貝化石などを題材として、手作り感たっぷりな展示となりました。

2004年からは、企画展「東北大学総合学術博物館のすべて」シリーズが始まりました。記念すべき第1回は、河口慧海が約100年前のチベットで収集してきた資料類を、仙台市博物館で展示しました。このときには、仙台市博物館職員のみなさまに大変お世話になり、企画展のノウハウを詳細に教えていただきました。その後も、企画展シリーズは続き、現在では第13回を数えています。

企画展シリーズ第10回「みちのくはアンモナイトの宝庫」では、仙台市科学館のエントランスホールにて、生きたオウムガイの飼育展示をおこないました。「ぐるぐる君」と「ぶかぶか君」と名づけられた2匹は、企画展終了後も大学博物館の展示室で愛嬌をふりまいていました（その姿は、ニュースレター34号表紙に見ることができます）。残念ながら1年あまりで2匹つづけて死亡してしまい、その後「2代目ぐるぶか君」を飼育展示しましたが、やはり1年あまりで死亡し、現在はサンゴや熱帯魚の生体展示をおこなっています（その経緯も、同38号・41号で紹介しました）。

収蔵物の管理では、生物学教室から移管された動物標本類を担当しました。そのなかには、約4,500点の液浸標本と、80点のタイプ標本が含まれています（関連記事がニュースレター21号と30号にあります）。とくに、戦前の日本や東アジア周辺で採集された海綿動物や苔虫動物などの貴重な標本が数多く収蔵されています。

今後も、多くの生物研究者の方々に、これらの液浸標本を活用していただきましたら幸いです。

また、学生スタッフの尽力により、博物館に収蔵されている化石二枚貝類の担名タイプ標本のデータベースの公開を始めました。この作業は、前任者から引き継いだもので、本学で新種記載され、担名タイプ標本が収蔵されている種について、標本の情報や画像を掲載し、ウェブサイトから検索できるものです（詳しい説明はニュースレター45号にあります）。こちら、ぜひ多くの古生物学研究者のみなさまにご活用いただけましたら幸いです。

2011年3月の東日本大震災以降は、多くの博物館スタッフが、被災した各地の自然史系展示施設において、標本レスキュー活動をおこないました。私も仙台市科学館の方々と協力して、津波により破損した生物液浸標本類の復元にたずさわりました。

現在も東北地方の復興は道半ばで、

大学博物館でやり残したことも多く、この時期に他大学へ異動することには戸惑いもありました。また、卒論や修論を担当している学生の皆さんにも迷惑をかけることとなり、本当に申し訳なく思っています。

しかし、これまで大学博物館でみなさまからいただいたご恩と同様に、新しく私にあたえていただいたご縁も大切にしたいと考えています。大学博物館での貴重な経験を生かして、新天地でもさまざまなことに挑戦したいと思います。

今後も、東北大学総合学術博物館のますますのご発展を心よりお祈りします。そのためにも、さまざまな場面で少しでもお役に立てればと願っています。これまで長い間、本当にどうもありがとうございました。

* ニュースレターのバックナンバー（30号以降）は、本館ウェブサイトからpdfファイルをダウンロードすることができます。

学生スタッフの博物館 —— 総合学術博物館の魅力

総合学術博物館のサポーターとしてはたらく「学生スタッフ」たちが、ふだんの仕事や博物館の魅力を紹介します。第1回は、学生スタッフ最古参の静谷あてなさんが、制度設立までの流れと展示デザインの仕事についてお話しします。

※

わたしが博物館の学生スタッフになったのは、2011年の秋のことでした。この年、博物館の佐々木理先生らが中心となって、たんなる「作業者」としてではなく、学芸員課程のように教育的な目的をもって、学生のなかから博物館運営のお手伝いを募ろう、という企画がもちあがりました。

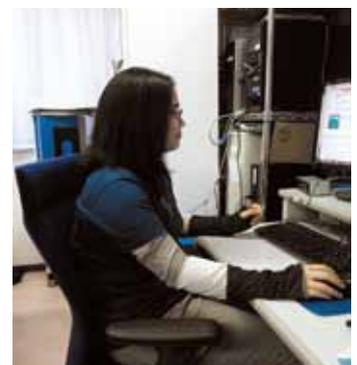
最初に集まったスタッフは私を含めて6人ほどで、理学部自然史標本館の仕事が中心になることから、全員が地学専攻の学生でした。

スタッフは学部生から博士過程の院生までいて、それぞれが自分の得意分野を生かして博物館に貢献していきました。たとえば、古生物を専攻する学生は古生物標本の整理を手伝い、サンゴを研究する学生はサンゴの飼育展示を始める、といった具合です。

以来学生スタッフたちは、メンバーを入れ替えながらも、学生ならではの立場から博物館の充実化の一助をなすものとして活動してきました。

わたしは絵を描くのが好きだったので、おもな仕事は展示物や企画展・イベントポスターのデザインになりました。研究成果や展示物の魅力をわかりやすくみなさまにお伝えするというのが第一目標ですが、そのためには展示物の観察や関連資料の勉強が欠かせません。専門家の先生方にも監修していただきながら試行錯誤を繰り返して、みなさまにお見せできるかたちにしています。

先日開催した田んぼの生きものイベントのポスターもその一例です。制作を依頼されたとき、いろいろな生きものに会おう期待感をこめようと、ポスターに「仙台市街地の水田にこの時期生息するはずの種」をたくさん描きこむことにしました。しかし、最初に自分で選んだ種の内には、日本地図上の生息分布域に「宮城県」が含まれていても、「仙台の市街地」では見つからない種が混ざっていたのです。初稿でそういったご指摘を先生からいただき、



作業中のようす

いくつかの種のイラストを差し替えて、最終的に、学術的に「より正しい」ポスターに仕上げることができました。

みなさまが博物館にお越しになるさいは、このようにイラストにおけるちょっとした裏方なりの「学術的こだわり」に気づいていただければ幸いです。専門知識を身に付けるのはもちろんのこと、見ていただいた方には、目についた、興味をもったとおっしゃっていただけるよう、ますます精進を重ねていきたいと思っています。

（理学研究科地学専攻

博士1年 静谷あてな）

東北大学総合学術博物館
Information



2015年3月に開催される国連防災世界会議に向けての取り組み

総合学術博物館では、本学広報課、東北大学災害科学国際研究所、文部科学省博士課程教育リーディングプログラム、東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラムや数多くの企業などと協力し、2015年3月14日～18日に仙台市で開催される国連防災世界会議に向けてMRシステムによる3次元震災遺構の展示とさまざまな分野の救援・救助活動や研究について解説するパネル展示をおこなうための準備をしています。

世界中から防災担当者やメディア、多くの市民が集まるこの会議で、東日本大震

災の被害がどのようなものであったか、その被害に対して東北大学や警察、消防、自衛隊などがどのように対応したか、そして、東北大学をはじめとする研究者がおこなった震災に関連した研究やさまざまな支援活動などを展示・発信する予定です。

メインとなる震災遺構のMR3次元展示は、復興が進む被災地ではすでに残されていない被災現場を再現することができます。津波の規模や被害がどれほどのものであったかを世界中の方々に見ていただけるものです。

東日本大震災では、被災地は国内のみならず世界中からご支援をいただきまし



MRシステムのデモンストレーション

た。これらの震災展示をご覧いただくことにより、世界各地の防災や減災のために少しでもお役に立てればと考えています。

(文=鹿納晴尚)

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



総合学術博物館のホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館

THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum



【オムニヴィデンス】

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

■仙台市営バス

(1) JR仙台駅西口バスプール9番のりばより、〔719系統〕(青葉通・理・工学部・仙台城跡南経由 動物公園循環)に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩1分。所要約20分。
(2) または同じく9番のりばより、〔710系統〕か〔713系統〕、〔715系統〕(宮教大、青葉台、成田山行き)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩4分。所要約25分。

■仙台市観光ステループバス「一ぐる仙台」

JR仙台駅西口バスプール15-3番のりばより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約30分。